

🔧モノづくりを考える! 第53回

小さな町工場だからこそ、
創意・工夫と挑戦を止めない!

永井製作所 東大阪市角田1-11-5



7月、大阪産業創造館で開かれた『金属加工金型技術展』に出展した永井製作所代表の永井知明氏が語る表情には笑みとともに自信があふれていた。「出展企業はすべて株式会社。個人事業者はうちだけです。」

永井氏は宮崎県の出身。集団就職で来阪して金属加工（プレス）の会社で働いた。府立布施工業高校の定時制課程で学び、卒業時（1970年4月）に後輩2人を誘って貸工場で独立した。その積極果敢な姿は50数年を経た今も続いている。技術、受注、採用育成のいずれにも創意と工夫を働かせて溶接の事業を展開した。時代の先鞭となったのは口

ボット元年と呼ばれた1980年の早い時期にロボットを導入したことである。町工場の取り組みとして異色であった。産業用ロボットを次々に増設したが、そのメンテナンス費用対効果が割に合わず、昨年5台目のロボットを廃棄した。この推移には時代を読む先見性がよく表れている。事業を充実するなかで機械の大型化を図ったが、採用育成の観点から大幅に見直した。男性の力仕事に頼る大型部品から小物部品に転換して2000年代に女性の採用を始めた。2004年、工場内に保育コーナーを作った。赤ん坊連れで働きたい、という女性を採用したからだ。2畳強のスペースでクーラー付き。お母さんは透明なアクリル板越しに子供を確認できる。9人の作業

者は全員が女性。現在は女性4人が就労している。技術面での注目すべき取り組みを紹介したい。昨年後半、大阪府のマイスター研修に応募して週1回アルミ溶接の技術講習を社内ですより高次元なアルミ溶接技術を習得した。【写真は受講の様子】

永井氏が抱く現在の信条は「治具は命」である。治具とは部品を正しい位置に取り付け固定するのを助ける道具であり、独自の治具を開発して安定した品質と納期遵守を実現している。半世紀に亘る技能習得が治具設計に活かされている。

（工場を記録する会「工場兄妹」の発行）

東大阪市技術交流プラザ



作業風景動画